



○悪のドラマ化で巨大化したオリンピック

(マカルーン著「オリンピックと近代—評伝クーベルタン」より)

「…過去のおいてと同様、いかなる機関がこれを組織し、いかなる方向性をもって運営するかによって、スポーツは有益とも有害ともなりえよう。スポーツはもっとも気高い情熱のみならず、もっとも卑しい熱情をも目覚めさせてしまうのである。…無私 of 精神、名誉の理念育みもすれば、利欲を刺激する可能性もある。…平和を促進するためにも、戦争をひき起こすためにも使いうるのである。…」

(I O C 会報二号に載せられたクーベルタンの文)

この文を引用した上でマカルーンは、こう評する。

「…クーベルタンが初めから悪に対して盲目ではなかったことは明かだろう。オリンピックが生み出すことになる醜悪事件、邪悪な快楽、不穏な裏工作などは一少なくともそれらのうち彼が認識しえたものはクーベルタンにとって悲しみの種ではあったけれども、決して驚きの種ではなかったのである。十九世紀に生きた功利主義・進歩主義的精神の持ち主にはやむをえないことだが、彼に見えなかったのは、悪のドラマ化、善悪の葛藤のドラマ化こそが、やがてオリンピックが地球代に繁栄するために不可欠な要素になる、という一点である。…」

○オリンピックはもう一つの戦争 (寺山修司評論集—一九七二年ミュンヘン・オリンピックに寺山主催の「天井桟敷」が芸術行事に参加し、その体験を書き記したもの)

「オリンピックはいつのまにかスポーツマンの祭典ではなく、もう一つの戦争になってしまった。クーベルタンは『国家の尊厳』に殺されてしまったのだ。百メートルランナーの栄光も悲惨も、いまでは国家が肩代わりしてしまい、選手は国家のスタンドイン (代理人) として走っているだけにすぎなくなった。百二十二本の国旗が掲げられたときから、オリンピックは政治的なゲームとして開始され、その歪みを引き受けて、テロを誘発するに到ったのだ。…」

「この事件 (アラブゲリラによるイスラエル宿舎襲撃事件) ドイツ問題でもなければユダヤ問題でもない。まさに『オリンピック問題』なのだということを関係者は知らねばならない。オリンピックを政治利用しようとする者は政治の返り血を浴びたとしても当然であり、いまの方式でオリンピックを継続しようとするならば同じような事件はモントリオールでも必ずおきることになるだろう。…」